なぜ英語が話せないの

〈25〉

実用から遊離した問題
外人さんも首ひねる表現

「何年やっても、モノにならんのは英語やな」――テレビCMではないが、わが国の入試英語ほど実用性が少なく、暗記力テスト化した問題はない、と語る外国人は多い。単に入試問題にヒアリングを導入していないという批判だけでなく、問題自体が日常使われる英語から遊離したものが自立つとの指摘である。

「百万人の英語」講師でおなじみの英国人作家アラン・ブース氏(三五)がこのほど「日の丸英語は救えるか」と題した小冊子を出版した。日本の英語教育の欠点を痛打した「日の丸英語に物申す」に続く第二弾。筑後地方の若手英語教諭で結成している「久留米英語講習会」(真崎良幸会長)が出版を側面から援助した。

ブース氏の言い分は「日本では、有害な教科書を使って、不自然な入試を行い、役に立たない英語を教えている」――になるの一つ。They say it is good.という文章をIt is said that it is good.への書き換えは、良い文章を日常会話で用いない表現に改悪させるもので、こんな問題なら他にテストすべき内容はたくさんあるはず、と強調している。

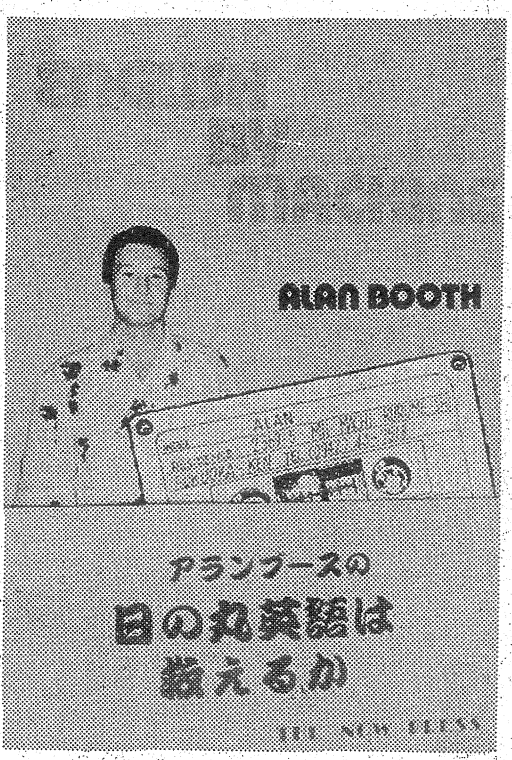
例えば、高校生の教科書は欧米人でさえ首をかしげる難しい単語が多く、日本でいう基本的な単語千百八十語のうち約二〇%は、英国民が使う基本二千単語の中にも含まれていない。

入試の欠陥ぶりもひどい。発音やアクセント問題は、正しい発音が出来なくても記憶していれば答えられる。「まるでIQ(知能指数)テストか、合格のための技術試験をしているようなものだ」。

入試によく出る書き換え問題は、例えば、It is difficult for foreigners to use chopsticks.は文章としては正しいが、外国人がはし(箸)を使うのは難しいという日本人の固定観念が強く出ていて、外国人の無器用さを印象づけるような表現。「決して好ましい文章とは言えない」という。

ブース氏は、さらに入試問題の作成に当たっては、外国人をスタッフに加えて意見を聞くべきだと話している。

さらに日本人は、日本が小国という"幻想"を抱くあまり「日本は、米国の二十五分の一の大きさ」を表現する際、Japan is one-twenty-fifth as large as America.と書くが、largeはむしろsmallとすべきところ。英語の表現としては、大きい方を先に書くので、America is twenty-five times as large as Japan.が一般的だ。日本国土の広さはヨーロッパの諸国からみるとトップクラスにあり、決して小国ではない。こうした日本独特の表現がいつの間にか定着して、入試にも登場している――と指摘している。



出版されたブース氏の英語教育の批判本